

《関西大学国際活動事例集》

- A) 途上国における開発援助の研究
- B) 日台国際チームによる協働作業を通じて養成する異文化理解力・外国語力・交渉力を習得するメカニズムの実証研究

外国語学部
教授 吉田信介

【この活動の概要】

主な活動	A) テレビ番組による授業改善計画プロジェクト(通称EQUITV) B) 日台国際チームによる協働作業を通じて養成する異文化理解力・外国語力・交渉力を習得するメカニズムの実証研究
関係機関	A) JICA、パプアニューギニアの教育機関 B) 義守大学をはじめとする台湾の大学および高等学校
実施時期	A) 2003年—2009年 B) 2009年より継続中

【先生に直接聞いてみました。】

—— 2つの研究活動の背景は？

国連は、持続可能な開発のための2030アジェンダにおいて、「我々は、人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解放し、地球を癒やし、安全にすることを決意する。我々は、世界を持続的かつレジリエントな道筋に移行させるために、緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることに決意する。我々はこの共同の旅路に乗り出すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う。」として17のSDGsゴールを示しました。

そのうち、SDGsゴール4では「質の高い教育をみんなに」とし、すべてのSDGsの達成に不可欠であることから、国際社会は教育開発への取り組みを強化しています。

その理由として、教育はすべての人が等しく享受すべき基本的権利であり、人間一人ひとりが自らの才能と能力を十分に伸ばし、尊厳をもって生きていくための基盤となるとともに、持続可能な社会・経済発展に欠かせない要素だからとしています。また、教育を通じた多様な文化や価値を尊重する態度の醸成は、インクルーシブで平和な社会の基礎と主張しています。

これを受けて、吉田研究室では、A) 途上国における開発援助の研究、ならびに、B) 日台国際チームによる協働作業を通じて養成する異文化理解力・外国語力・交渉力を習得するメカニズムの実証研究をテーマとして教育・研究活動を行っています。

研究 A) 「テレビ番組による授業改善計画プロジェクト(通称 EQUITV)」



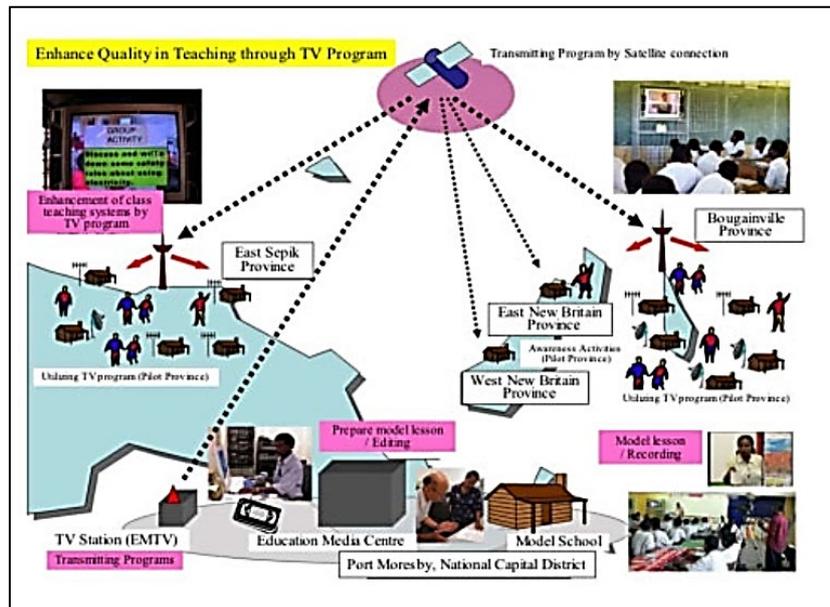
【モデル授業の全国配信の様子】

―― この取り組みを始めた経緯は？

本研究は、SDGs ゴール 4-c に相当し、そこでは「2030 年までに開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国における教員養成のための国際協力などを通じて、資格を持つ教員の数を大幅に増加させる」としています。

SDGs の前身にあたる「万人のための教育世界宣言(1990)」を受けて、途上国パプアニューギニアへの教育援助が開始されましたが、それは、国土の大部分が山岳地帯と離島でインフラが未発達であり、教育施設や教師教育が不十分であり、国民の半数以上が義務教育を修了できず、国家の重要課題であったからです。そこで日本政府が ODA 事業として国立教育メディアセンターを設置し、映像によるモデル授業を全国配信する EQUITV を実施し、各地の生徒のみならず担当教師の教育も同時に行う画期的な取り組みを行いました。

当時、千葉にある放送大学のメディア教育センターで研究活動に従事していた私は、この取り組みに共同研究員として働くこととなりました。



【EQUITV の概略】



【EQUITV による遠隔校の TV 授業の様子】

―― この取り組みの内容は？

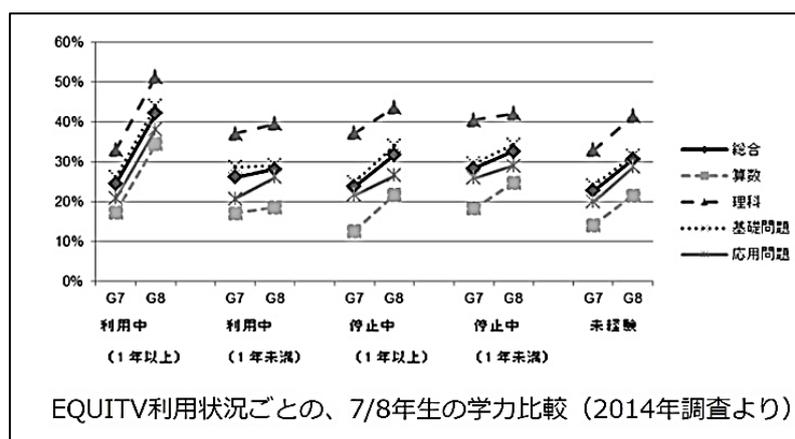
私は、JICA 専門家として、モニタリング及び評価（モデル授業番組と教員研修番組モニタリング評価）を担当しました。主要活動は中間モニタリングの実施指導で、遠隔校における TV 授業の実施効果とフィードバックを行うため、1）モニタリング指標の提案・選定・指導、2）遠隔校での効果的なモニタリング指導と現場教員へのフィードバック、3）遠隔地でのワークショップの実施と授業改善への提案を実施しました。

— この取り組みの成果は？

各地の TV 受信校では、協同学習等の授業運営手法の習得や、遠隔地で入手困難な実験実習用の教材・教具の画面での閲覧が可能となり、教師へのインパクトが大きく、彼らの教育力を大いに支援し、また生徒にとっても学習効果が上がり、学習意欲も向上し、登校率が大きく上昇し、全国一斉テストの得点も飛躍的に上がりました。このことで将来的には、基礎教育が充実することで、パプアニューギニア国の発展に貢献することが実証されました。

— 現地の教師、生徒の反応は？

パプアニューギニアでは中学卒業後すぐに教師として採用されることが多く、授業で生徒を教えることに自信がない先生が多かったのですが、TV 授業を受けることで彼らの教育力が大変高まりました。また生徒の学習意欲も当プロジェクトによって非常に高まりました。当プロジェクト以前はパプアニューギニアの生徒の就学率および学習意欲は低いものでした。しかし遠隔地で授業を受ける中で、テレビの中でモデル授業を受けている生徒の様子を見て、彼らに負けたくないと思うようになり、非常に熱心に勉強をするようになりました。TV 授業では主に算数と理科の授業を行いました。それぞれ学力が向上したことが明らかになっています。(下図参照) 大変興味深かったことは、このプロジェクトがきっかけとなって、村おこしを始める地域や、コミュニティの結束が高まった地域が出てきたことです。さらに彼らはこのプロジェクトを通じて、教育を受けなければ農業以外の仕事に就くことが難しいということに気づきました。教育を受けコンピューターを使うことができるようになれば、外国の企業で働くことができるという夢も持てるようになります。このようにして現地の人が自立し始めたことで、援助を受けることによって逆に現地の人が働く意欲を失ってしまう、いわゆる“援助付け”も解消されました。また教育が広まることによって、地域の治安も良くなりました。



— 苦労された点は？

パプアニューギニアは 1 万近くの島で成り立っている島嶼国家です。島には非常に標高の高

い山々がそびえていて、主な移動手段が飛行機でした。飛行機を降りた後は、ジャングルの中をランドクルーザーで移動しました。このようにパプアニューギニアでは交通が非常に不便でした。また食べ物はバナナやココナッツが中心でお米を食べることができませんでしたし、マラリアの危険もありました。さらに、都市部の治安が良くないことがあげられます。

研究 B) 「日台国際チームによる協働作業を通じて養成する異文化理解力・外国語力・交渉力を習得するメカニズムの実証研究」

―― この取り組みを始めた経緯は？

本研究は、SDGs ゴール 4-7 に相当します。そこでは「2030 年までに持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」と宣言しています。

このうち、グローバル・シチズンシップ、および、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育について、グローバル人材の育成の体現の場を設定し、文部科学省・台湾高雄市教育局後援のもと、過去 20 年間アジア圏 8 カ国および国内から 50 校、合計 250 名の高校・大学生が連携した「アジア圏高校・大学国際協働プレゼンテーション大会」を実践してきました。ここでは、リング・フランカ（共通語）としての英語と遠隔 ICT を活用し、国境を越えて一つの課題に向き合い、交渉してまとめ、最終的には現地で異文化交流を行いながら、制作物をプレゼンテーション大会で共有しています。

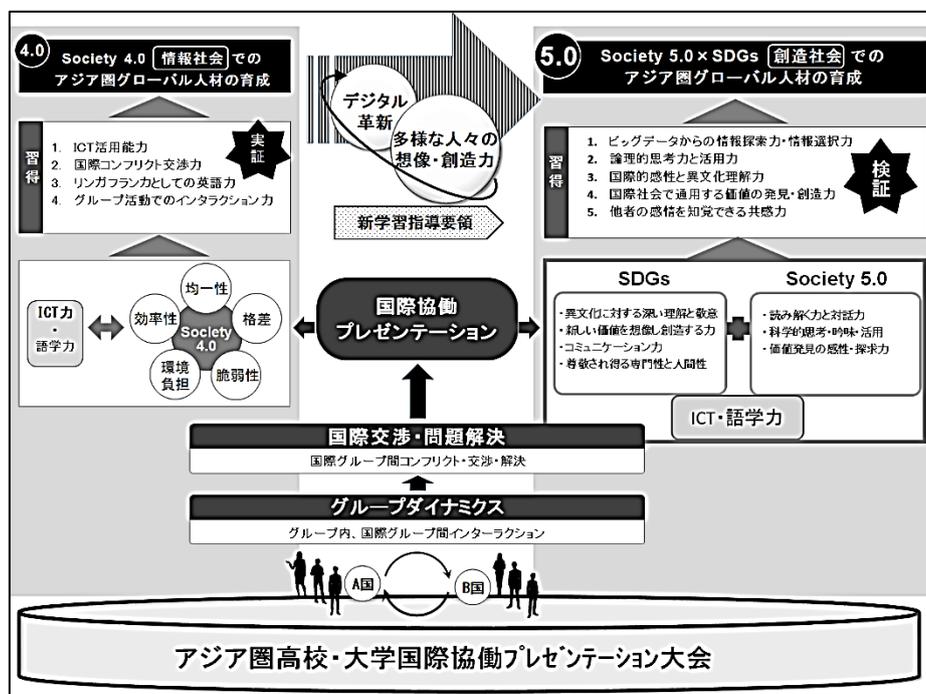
―― 先生のこの取り組みの内容は？

この取り組みを通して、言語学、教育工学、コミュニケーション学などの観点から様々な実証研究を行ってきました。しかしながらその後、デジタル革新による「創造社会 Society 5.0」にとって代わり、そこでは、1) 文章や情報を正確に読み解き、対話する力、2) 科学的に思考・吟味し活用する力、3) 価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力（文部科学省、2018）が要求されるようになりました。

同時に、SDGs では、問題解決に貢献できる人材育成、国際的に活躍できる人材育成が求められるとされています。具体的には、1) 異文化に対する深い理解と敬意、2) 新しい価値を想像し創造する力、3) コミュニケーション能力、4) 尊敬され得る専門性と人間性があげられます。

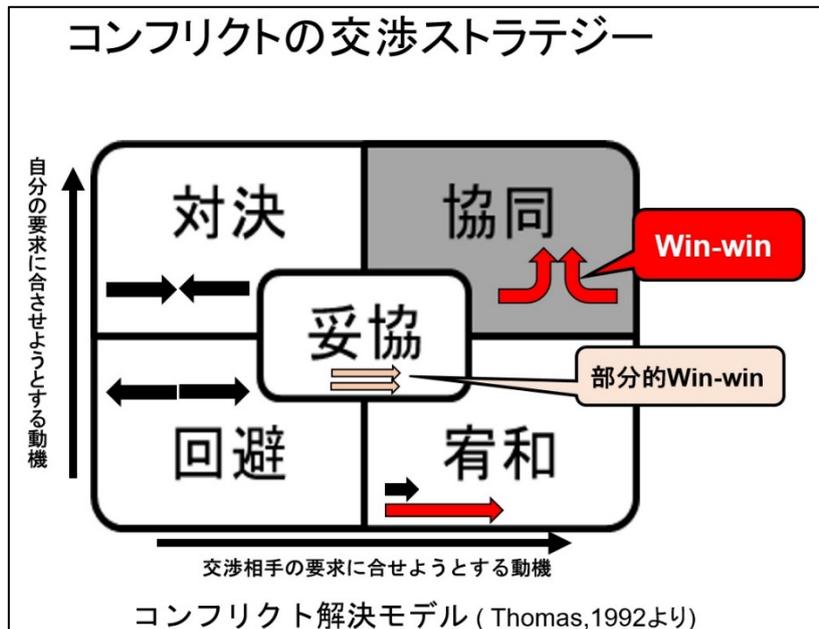
そこでこれらを受けて、新たに、5つの検証項目を追加し、参加者に事前・事後に各指標測定テストを実施し、多角的に本プレゼンテーション大会の有効性を検証し、加除修正を行いながら持続性のある「グローバル人材育成活動」にバージョンアップしています。それらは、1) 「情報学」からは、ビッグデータからの情報探索力・情報選択力、2) 「教育心理学」からは、論理的思考力と活用力、3) 「異文化間コミュニケーション学」からは、鋭い国際的感性と異文化理

解力、4)「心理測定学」からは、国際協働による国際社会で通用する価値の発見・創造力、5)「人間性心理学」からは、他者の感情を知覚できる共感力、についてそれぞれ検証しています(下図参照)。



―― 苦労された点は？

この「アジア圏高校・大学国際協働プレゼンテーション大会」は日本、台湾をはじめとするアジア各国の学生が参加しています。関西大学からは私のゼミの学生たちが参加しています。また大学生だけではなく、高校生も参加しています。参加者である学生たちは、生まれ育った国も、文化も、世代も、異なる学生たちと学校ごとにペアを組み、協働してプレゼンテーションを上げる作業に取り組みます。そこでは当然、コンフリクト（争い）が生じます。コンフリクトの解決ストラテジーとしては、回避・対決・宥和・妥協・協同があります(下図参照)が、私は学生たちに安易に妥協させたくありませんでした。なぜなら安易な解決方法である“妥協”は部分的なWin-winになってしまうからです。学生たちが、“対決”や“宥和”を経て、“協同”という最善の解決策にたどり着くように成長を促しました。“協同”は他の解決策に比べて時間・積極性・協力が必要ですが、両者にとって最適の解決策を提供するからです。また、プレゼンテーションにあたってはリハーサルを通じて、ステージに立つという非日常的な場で発表を成功させるために、演劇学におけるパフォーマンスやジェスチャーをはじめとする非言語的コミュニケーションを学生たちに指導しました。



―― この取り組みの成果は？

この国際協働プレゼンテーション大会というオーセンティックな場を通じて、学生たちは、

- コンフリクトを乗り越えて、Win-winを達成するノウハウの習得
- 新しいアイデアを生み出す創造力の醸成
- 実践的コミュニケーション能力としての国際交渉力の育成
- 国際協働プレゼンテーションでのグローバル表現力の発揮

といった成果を身に着けることができたのではないかと考えています。

また、この取り組みを通じて、学生たちはアジアのいろんな国籍のひとに通じる英語力、リンガ・フランカとしての英語、つまり World English を獲得できたと思っています。



研究者氏名	吉田 信介
所属学部・学科等	外国語学部 外国語学科
職名（資格）	教授
専門分野	英語教育学、教育工学、国際協力
研究者情報	http://gakujo.kansai-u.ac.jp/profile/ja/e5d390yfba0e2tebcc93ad81d95d6.html